



TITLE:

# 明代の救済制度

AUTHOR(S):

清水, 泰次

---

CITATION:

清水, 泰次. 明代の救済制度. 經濟論叢 1921, 12(4): 648-658

ISSUE DATE:

1921-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127764>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十卷 第四號

大正十四年四月一日發行

## 論叢

勞働資本協調方法としての利潤配分……………法學博士 田島 錦治

需要曲線供給曲線及び價格曲線……………法學博士 河上 肇

地方所得稅に於ける特別稅對附加稅……………法學博士 神戸 正雄

獨逸直接稅の變革……………法學博士 小川 郷太郎

植民地の財政政策……………法學博士 山本 美越乃

## 時論

農業銀行國營の必要……………法學博士 河田 嗣郎

## 說苑

各國貿易概觀……………法學士 小島 昌太郎

## 雜錄

Sunderlandの日本文明評……………法學博士 財部 靜治

明代の救濟制度……………文學士 清水 泰次

の制度が、遠く周の代から唐の世までも命脈を保ち來つたのである。故に人と生れ出たならば悉く生活を既に保證されてるやうなもので、何の煩ひもなく平安な生活を持続し行かれそうであるが、實際になるとなかく、そう參らぬ。そこでかゝる生れたゞけでもう生きて行かれなくなつた彼等の生存慾に對して、生活力の供給に及ぶ問題が起り來るのであらう。

この問題になる救済にも自分二つの場合があるといはねばなるまい。その一は勞働の能力を有ちながら社會の缺陷から生活し得ぬものであり、その二は全くの勞働能力なきために生活し兼ねるものであらうと思ふ。たゞ前者であるとなれば彼等の有する勞働能力を發揮させ生活を満足させやうとする方法だけで充分であるが後者になると、勞働の無能力者にもいろ／＼の種類や性質を含むようであるから、それ／＼の救済により事頗る複雑にならうと考へられる。而してこれらの救済は、單に井田や班田の時代ならば生活し得たらうに今はそれら制度の崩壞

## 明代の救済制度

清水 泰次

一 支那に傳はる古くからの思想によると、生れ來た程の人ならば働きの有る無しに係らず生きて行くべき權限を持つべきものとせられた。従つて兼併を防ぎ均分を齎すやうな班田や斑田

により生活し得ぬといふ理攻めの所以ばかりでなく、人道の徳義よりも是非必要であるに違ひない。

然らばかうした労働の無能力者でまづ一般的なものは何であるかを考ふれば、子供婦人老人及び疾病の人達であらねばならぬ。ところがかかるものゝ救済は必ずしも同一筆法でなく、子供と婦人の救済と老人と疾病者との救済とに自らその選を異にするものあるらしく見ゆるから聊がその説明を試みよう。

二 第一に子供と婦人とは等しく全くの労働不能であるけれども、小供は近き將來に於いて必ずや充分の労働能力を發揮すべき可能性を有するものであるから、これに資本を投じて買ひ置かば、他日相當の利益を收め得べき機會に到達するであらう。また婦人ならば當時の支那に於いて現在も將來も餘りたいたした労働能力を期待し得なからうけれど、これを購ひ來らば婢としても妾としても可なりな役に立つ。故に子供や婦人ならば金で求めんとするもの決して皆無と

謂はれぬ。況んやそれは一夫多妻の制度が婦人の賣買からのみ成立する習慣からも、そうと斷言せねばならなからう。

いまそれらの賣値について正確な數字を得たと思ふけれど未だその機に接しない。僅に大學衍義補に於いて十餘歳のもので三五日の食に易ふ位なのを知るだけである。而してそれも現今天津や上海で賣買される者達の値段が、概ね十餘歳ならば十餘圓なのに較べて、なほ安いといはねばならぬ。然し貧窮の場合に働かすしてたゞ食のみ食ふ子供や婦人を包容する、家族として非常な負擔であるから、恐らく止むを得ぬに出でたことであるに相違ない。だから明の丘濬もその名著の大學衍義補卷十六でその偕に亡びて益なきを知つてなりといふて居る。蓋しこの意味は饑に瀕する子女を力あるものは宜しく買ひ取り救ふべしと近頃命令した張作霖の心根と合致するもので、たゞ吾等はこうした積極的な命令が、明代の史料に見えないのを頗る不思議とするだけである。

ところが明代に於いてかゝる饑に瀕する子女の買ひ取りを獎勵する形跡の見ゆぬばかりでなく、寧ろその頃としては可なり不似合ひやうな既に賣られた子女をも贖ひ返へす方法が眞面目に講ぜられて居つた。現に朝廷から内帑金を下し政府からも役人を派し眞摯に取り計つたのである。勿論これは正統十三年の皇明實錄にも見ゆるやうな、各處の豪民が好んで行つた金を貸したカタに子女を取る惡辣な弊風に對する警告と考へて考へられぬこともないが、他面に爲政者の徳を民草に及ばしめようとする人道的施設と思はねばならぬ。

かゝる贖ひの法は非常な善政に違ひないけれど、今や子女を購ふたことによつて利益を擧げつゝあるものゝ容易く承諾するところでない。恐らく皇明實錄の正統元年に載つて居る富豪巨室の反對は天下の子女を購ひ居る豪家の悉くの心持を代表するものであらう。また賣られ行く子女の身になつて考ふるも、衣食を唯一の慰安とせる境遇から見れば、不滿な人間より満足せ

る豚を選ぶかも知れないから、却つて買はれた家を好むものなしとも限らぬ。そこで弘治皇帝が卽位された時の勅にも、贖ひの金を下すが去存を本人の自由任せられたやうである。また去ることも留ることも欲しないやうな連中になると、政府がそれを一人五緡ぐらゐの値段で買ひ取り當時の必要であつた邊疆の軍隊に送り着けたらしい。

三 第二に老人は既に活動の責務を果したものであるから、これに對していまさら勞働を強ふべきものと思はれず、寧ろ相當の敬意を拂ひ置くべきであらう。けれども毎日の食物を爭ふて求めねばならぬ貧窮の生涯にありては、かゝる意味での長老も尊敬もあつたものでない。従つてこゝにいふ勞働の時期を過ぐし、自ら活き得ぬ老人は賣られやうとするも買ひ手のないのであるから、否應なく棄てられねばならぬ。現在の支那それも都の中にかく棄てられた老人を、素通りの旅客でさへ認めねばならない程である以上、まして明代に於ては決して謂はれ

なからう。然らば同情の念慮からも都市の美觀からも、これらの收容さるべき養老院らしいものゝ設立せらるゝ必ずしも名君を待つて後に成るものと思はれぬ。

明の太祖は即位すると五年目に養濟院を建てるやう全國に勅を下した。然し果してその通り全國に行れたかどうか疑問とせねばならぬ。恐らく僅に南京をはじめとし四五の都會に設けられた位のものであらう。それとて未だ養老院や孤兒院の別に發達しない時代であるから、この養濟院も老人と子供とを一緒に收容せねばならなかつた。それはこの養濟院が初め孤老院といひ後に養濟院と改めた因縁からも、またその規約に大口小口の文字を用ひて居ることからも充分に察せられやうと思ふ。

かくて養濟院は老人や子供でまた疾病のものと貧窮のあまり頼る邊なき人達を招き入れた。けれどもこれとて彼等の欲するがまゝの人数に應じ兼ねるところから、まづ通政司に上申し戸部に上告しそこから地方に彼等の生活を報告さ

せ、それから許可を與へたのである。然しこれも濫りに收容するを防ぐ方法に相違ないとするも、それでは餘りに煩瑣で文牒が通政司から戸部それから地方と上下する間に旬月を過じ、従つてあたらず救済の美名にもそのために瀕死の人達を無理にも殺すことないとも限らぬ。そこでその後巡城御史や兵馬司官が町で乞食に遇ふたならば役所へつれ行き、貫籍を問ひ世話する人達のあるないを聞いたゞけで、養濟院に入れてもよいといふことに改められた。恐らく宣德三年に北京に居るだけの乞食を悉く其處に收容し盡したとの名高い話もこの心持ちに外なるまい。

さらばこゝに收容せられた人達がそこでいかな待遇を受けて居つたらうか。餘り精しい記載もないので吾等も現代の養老院や孤兒院からそれを想像するより仕方ないが、たゞ一つの疑問が起らねばならぬ。それは彼等が共同の食卓につく代りに一人づゝ別々の食卓を營むことである。吾等も初めは月米三斗を與ふといふ文句に

逢ふたとき、いくら何でも同じ養濟院に生活しながら食事を別にするとは少く受取れぬ所位に心得たから、月々一人に三斗の割で與ふるものらしく解釋して來たが、後に薪三十斤を與ふる記事を見るに及んで、いよく各人が別々な食事を斷定せねばならぬと考へた。思ふに支那人の家屋が獨立であり、國民性の傾向も孤立なせいにも依らうかなれど、實は食事に於けるさもしい争ひを避けるためであらう。

四 支那のやうな恩恵のない自然と安定のない社會とに生きて行かねばならぬならば、饑饉や兵荒に折々見舞はれねばならぬ。従つてこれから生じ來る人達を——幾百萬の人達を、かゝる粗末な制度を以つて到底保護しきれるものではない。けれども當時の思想から見てもまた人道の精神から察して、またよい運のめぐり來るまで彼等をとまかく生かして置く程度の救濟を標準にしてやるくらゐのこをせねばなるまいそこでさしあたり最も簡單に乞ひ來る者に命の綱なる米や粥を與へまたこんな時に罹り易い病

氣に對して相當の處置をひたすらつけることに急がねばならぬ。

かうした飢ふる者に米を與へて自ら爨がしむる場合に洪武二十七年の散糧則例や永樂二年の給米則例によると、大人は六斗で小人は三斗である。然しこれだけでは大人も小人も六斗や三斗を一日に貰ふのか一月に貰ふのか見當がつかぬやうであるが、恐らく一期の災難に對して一度これだけを給する意味であらう。何故ならば専門の養濟院でも大人が一月に三斗であるからかゝる施米に一日及び一月に六斗は全く多過ぎるから。故に大人でも小人でもこれだけの米で次の收穫まで口を糊して行かねばならぬのだ。ところがこの施米に五歳以下の小供をあづかせぬのはいかにも殘酷らしく思へるが、これはかゝる年頃の子供をまだ親の下に含まるべく判定するから、必ずしも被救の數字に加へないのであらう。

然し施米ではいろいろの不便を免れない。よしや一期一度に施米し得る利益あるとするも、

まづ貯藏に困難せねばならずまたそれを爨ぐ薪に事缺かねばならぬ。そこで明の徐光啓の名著なる農政全書卷四十三を見ると呂祖謙は粥を最も下層な救済といふてゐるが、反對に席書は最も簡にして要な法とこれを説き審戸せすまた奸を防ぎ得といふて居る。だから北京の東西二所の寺院で宮廷が賄方を遣し、毎日六石の米を爨いで乞食に與へたのも決して偶然でなからう。しかも其時に兵馬官兵が街に沿ふて木札を配りあるき、巡城御史が給粥の世話をする程の仰々しさ。けれどもこれが京師のみであるならば恩を遠く及ぼし得ぬばかりでなく饑民を一所に寄せ集め却つて慮らざる騒ぎを惹き起さぬとも限らぬから、こゝに十一月半より麥の熟するまでを通じて大縣ならば十二所中縣ならば八所小縣ならば六所に給粥廠を設けさせ、普く食にありつかせたのである。

つぎに得て此折に流行する疾病の救済を考ふるならば、衛生や醫術の發達しない往昔にありては、殆ど述ぶるに足らぬと斷言するも宜しか

らう。然しこの取るに足らぬ幼稚な時代にも施療につき相當の注意を怠らなかつたことを認めねばならない。成祖の如き京都でさへ醫藥をよく試むるものゝないのを歎いて、宮廷にいくら藥を貯へても人民を濟ひ得ぬから、須らく施藥を行ふべしとその太醫院に勅せられた。また景泰皇帝の如きも乞食どもが集る人いさけのため病むものあらんを患ひ、四十人の醫者を擇んで四方に赴かせられた程である。もしこれを今の慈善病院から顧みたならば兒戯に類するもの強ちなしとせぬが、たゞ藥草のみを民間に植えしむるばかりで満足せなくなつた處に大なる値を置かねばならぬと思ふ。

五 いま吾等が北支那の饑饉で見聞するやうに昔の饑民もまたかくならば、座して死ぬか起つて生を爭ふかの二者の選擇を免れない。恐らく子を米に易へその米を食ひ盡すが命の切れめと死を待つもの、今だからあり昔だからなごゝいはれなからう。然しそれは氣の弱いもので強いものになつたならば、今の軍人が給料の不渡か



ら或は宜昌に或は長沙に荒はれ廻はるやうに、必ずや明代の饑民も掠奪をたくましくした筈であらねばならぬ。少しくその説明に従ひたい。

饑饉に死者の道に横はるを記さるゝは、いかにも支那人流の誇張と見ゆるが決してそうでないのだ。寧ろ饑饉でなくとも毎年この寒空になると、食なく居なくつい凍え死ぬもの、今も支那の北部を通じて夥しい數に上る位である。然らばどんなに葬りを重んずる、——唐の班田を行ふた時にも葬りのためなら、その賣つてならぬときめられた永業田をも賣り拂つてよいとせられた程に葬りを重んずる支那の國民も、それに一々町疇な埋葬などやられたものでなからう。果せるかな水葬や火葬を行ふて居る。そこで太祖は漏澤園を京師に義塚を地方に設けさせ、それらの風俗に違ふものを埋葬に改めさせた。これも風俗の敦厚から觀て是非にせねばならないことであるが、たゞ漏澤園といひ義塚といふと別なものらしく見ゆるが、後代の地誌で各地のそれらを調ぶると、何れも内容を同じう

するもので、現今も城外に存在する全くその遺跡と思はれる。

また飢に依る死に面してなほ生きんと狂ふ者は恐ろしい。それも蜚語や迷信に感激されたり、また富豪や官吏の壓迫より來る義憤なのだからなほ凄むからう。かくあればこそ正統の鄧茂七のやうに、彼等の一人が劉平王となつて我に續けといへば悉く従ひ、その連中も我等は良民であるけれど食を失ふたがため、やむなく起ちしと語るも決して偶然と評されぬ。従つてこの心持から彼の明末の闖賊を研究すると、彼等が富豪の倉庫をあばき米を衆に配けたことも、また同じ掠奪にも衣服を先にし財寶を後にしたことも、その眞底まで見透し得るやうな氣がする。吾等はいかに内亂が充分に成り立ち、それから革命が充分に誘導さるゝと信せねばならぬ。

かく死も痛しくまた亂も慘らしく、既にこれらに及んではもはや如何ともなし難いから、これまでにならぬうちに何とか始末をつけねばな

らぬ。即ちこれが救済の時機を失ふてはならぬ。恐らく蘇軾が早ければ早い程救ありといふたのもこの意味に外ならないだらう。従つて明代の報災則例によると、まづ災難の報告を敏活にするため、知院官といふ役人を各地に派遣し置き専ら救済を要すべき場合の上奏を司らしめ、またつぎに救済の順序を誤らぬやう絶食するものを第一に一日一食するものを第二に借り食ひ得るものを第三に決めてあるらしい。けれども上官への報告を條件としたらば、却つて一刻千金たるべき時機を失はぬとも限らぬから、特に急を要する例外に別にまづ施して後に報するも差支ないといふ、特例まで設けられて居つたのである。

六然らばこれらに要する救済の物資を如何に保存して來たかの問題がつぎに起らざるを得ない。それも一時で済むならば、朝廷より富豪をまで網羅したならば、その場をだけ凌がれやうかも知れないが、全國を通じてたら敷所ともなる救済の難業を、如何に處置すべきであらうか。

そこで是非とも數年に亘る生産を調節し、幾分を準備せねばならなくなる。こゝに種々なる倉庫が必要となつて來た。何故ならば當時の經濟状態にありては、貨幣は未だ充分な流通の價值を認められぬため、否應なく穀物によらねばならぬから。いまかゝる倉庫のうちで人のよく知れるものを挙げたならば、既に支那では遣ひ古るしたれど新規蒔直しの日本の問題に拾ひ上げられた常平倉に越すものあるまい。それから義倉社倉と下るであらう。ところが明で創め可なりの勳を得た豫備倉と濟農倉とに至つては、未だ識者に注意されて居らぬと思ふ。

常平倉は漢代に有名となつたが、其方法は米價の安い時に買ひ入れて釣り上げ高い時に賣り出して値を下げる調節にあるのだから、農業經濟になくてならぬ性質から觀て、もつと早くより行はれ來たものと謂はねばならぬ。また義倉は常平倉の官營なのに反し、國民自ら運用する隋唐の遺法で、毎年貧富の差等に應じ、粟麥一石以下を出すのだから便利この上なく、玄宗皇

帝の頃の如き常平倉の四百六十石に對し、義倉は六千三百石も貯へて居た程である。またつぎの社倉は義倉と性質を同一するけれど、その管理を村社と社司に任せて、所謂地方有司の横暴から免れやうと試みたのであるらしく、この模範とせらるゝ宋代の朱熹はこの米粟を平時に貸しつけ、十四年の間に三千一百石もの利を納めたとさへ評判せられた。

ところが明になつてから漢の常平倉唐の義倉宋の社倉とならんで豫備倉が發達したといはれる。この豫備倉は官營であるけれど、たゞ洪武元年に於ける太祖の詔によれば、各縣に四つ宛建てられた處に大いなる特色を有つて居た。その場所も或記録によると人民の多く集つてゐる所とするが、他の記録によると四方の縣の境らしく思へるも、恐らく文字に拘泥なく考ふれば、四つの倉を縣の四方に割りあてその範圍に於ける賑かな地に定められたのであらう。またその米の出し入れにも特色が認められぬ譯でもない。これまでの糴には概ね時價より高値にする

傾向であつたから幾多の弊害を伴ふて來たが、この豫備倉では時價のまゝにし、更にその管理も一に老人倉の名あるやうに、其地での篤實な老人をして取扱はしめたのである。

然しこれでも満足な救濟の出來かねたことは、宣徳の頃に周忱の建議で農濟倉の生れたのでも明であらう。思ふに從來の農夫は納税の場合に色々の手續を経て種々の場所にかけたのであるから、恰も生産者から消費者へ及ぶ間にある中繼者のため値の高くなるやうに、無用の割増をせられて來た。そこで今度は全くその中繼者を廢して、政府へ送り出す船着場へ直接に租米を運び行き、その幾分の剩餘を平時に積み災難に施さうといふ。従つてかく船着の水涯に建てられたからその倉を水次倉とも呼んで居る。これも救濟に功あつたことは大明會典の卷の二十に應天府水次倉五處とあつたり、また宣徳二年の江南の大旱に諸郡の農濟倉を發くと見ゆるのでも充分に證明されやう。

七救濟制度の組織は略これに盡きて居るが、こ

れよりもその作用に於いて多くの困難を認めねばならぬ。それは倉庫それ自身につきての弊害と、その倉庫を維持して行く財源の枯渇とに、分けて考ふれば恐らく思ひ半ばに至らう。まづ前者を述べそれから後者に及ぶを便と信ずるからそれに従ふ。

倉庫とてあの廣い地に一つ二つ建てられるのだから、倉庫の所在地に居るものはそれだけ利を受ける代りに、それより遠い者はともすれば倉の米にありつかぬ不便を感ぜねばならぬ。然しそれは致し方ないとするも、まだ米を買ひ入るゝにも賣り出すにも、脱れられない惡風がつきまどつて居る。即ちこの時に相場を標準にするならばまだ衆目の仰ぐところで定つてゐるけれど、それより高くなり安くなりするときになれば、その率をどうするかゞ人によつて違はねばならない。またよしやそれも定められたにしても、着腹しやうといふ人達の加減がどうしても防がれぬやうな氣がする。

けれどもそれは餘りの心配であらう。然しこ

こにその施米を如何なる範圍に於いてするかの問題が起り來べき筈だ。思ふに限りなき米を以つて臨むならともかく、やゝもすれば足りぬ勝ちな施しをするなら、まづ貧者を先にし富者を後にすべきであるが、富者は權威を翳して利を配つこと自らに厚いのを免れない。また同じ貧者でも強いもの殊に市井の無賴漢に出遇つては、暴力を提げて切り取らぬともいへぬ。その上に施米すべき饑饉にもいろ／＼あるから、その程度に應じてその範圍を定むるに、人の知らぬ心配と私慾が働かぬと誰が見る者を。

かく米を貰ふ場合にもこれだけの非道が行はれそうならば、米を借りて生き後に返へす折柄に、なほさら我欲が手傳ふことであらう。まづ冬に借りたらば秋に利を添えて返さねばならぬが、既に借りねばならぬ程ならばそう樂に償へるものでない。従つて納めぬものも多からうし、また返へすにしても官吏に賄賂して誤魔化すのも、官吏と通謀して石や砂を入れ顧みぬのも尠しとせぬ。そうしたらばその倉庫の維持が

すぐ困難となるべきであるが、然らばその財源を何處に求め來たであらうか。

明史によると各地の老人を煩して鈔二百萬貫を齎し銘々の豫備倉を充したやうであるから、初めは朝廷の出資であつたに相違ないが限りなく續くものでなければ其後はどうしたらう。況んやこれに倉庫の修繕なども加はらねばならぬから。その第一は國民の收入の幾分を強制的に取り立てたものであるが、それは餘りに酷いといふところから、和糴の美名を用ひたけれど、恐らく内容に變りあるまい。その第二は國民のうちより米を多く献じたものに名譽を與ふるもので、二百石ならば正九品だとか、一千五百石ならば敕して義民とするとかの規則まで作つてある。その第三は官吏の勤情となるもので、一定の期間に一定の貯米をなせば陟されなれば黜けらるゝ程であつた。それでも甘く行かぬのか、太倉の上納からや罪人の贖金から補ふて居たが、まだ及ばず、果は大和山の香錢や其他の零碎なので絞り出すに苦心して居たやうである。

ハ これまでも骨折つてもそれでも駄目だ。明は饑饉に迫れる亂民のために滅されたのである。それもその筈であらう。孔子の本心はそうでもあるまいけれど、その衣鉢に坐食する連中は悉く輪煥たる制度によつてこの世の人を救ふ、いや救ひ得と信じて居たから、勿論制度も必要であり周禮も六典も必要に相違ないが然し制度のみでは人は治められない。試みに王安石の新法を見たならば、制度の一つ一つに決して反對者のいふやうな不都合を見ないけれど、ただ制度にだけ依らうとしたから失敗したのだ。

またこれを逆に考へたならば、支那の制度は三千年の昔よりそれ程に進歩した形跡を示して居らぬ。それなのに代々の革命がある。然らば革命は何のために存在したのであらうか。曰はく人心を新規にするより外に何もない。即ち制度は常に美しく立つがその制度に宿る人の心が腐つて來る、その腐つた心を追ひ出すのに外ならない、だから制度も大切に違ひないが、それを運用する人の心がなほ大切であらうと認めねばならぬ(一九二・一・二四)